（様式第２号　道民意見提出手続の意見募集結果）

道史編さん大綱（素案）についての意見募集結果

平成３０年２月１日

道史編さん大綱(素案)について、道民意見提出手続により、道民の皆様からご意見を募集したところ、８人、２団体から、延べ２９件のご意見が寄せられました。
ご意見の要旨及びご意見に対する道の考え方については、次のとおりです。

１　編さんの目的（１件）

意　見　の　概　要	意見に対する道の考え方※
（1－1） 「郷土の歴史に対する道民の理解と関心を深めるとともに」は削除してよいのではないか。新しく編さんされる道史を基に、教育関係者が道民の理解と関心を深める活動をするのではないか。役割分担を明確にし、編纂は歴史的な資料を後世に残すことに集中し、目的は絞って少なくすべき。	教育関係者が道史を基に道民の理解と関心を深める活動には大いに期待するところですが、道史を道民に読んでいただくことなどにより、郷土の歴史に対する道民の理解と関心を深めることも、編さんの主要な目的であると考えています。 D

２　編さんの方針（７件）

意　見　の　概　要	意見に対する道の考え方※
（2－1） 日常的に町史類を見ていて思うことは、資料の重要性。資料やデータを多く記載して欲しい。根拠についての記載がない場合や、統計データをグラフ化しようとしてもデータに連続性がないこともあり、データは漏れ無く掲載してもらいたい。 写真についても、道内の市町村に散在している写真をたくさん収集・掲載していただきたい。	資料の提示に重点を置くことの中には、文書資料ばかりでなく、数量的なデータの提示も含まれるものと考えます。また、写真資料は各地域の状況等を表すものですので、数多く収集・掲載したいと考えています。 B
（2－2） 「…道民に親しまれるものとすること」とあるが不要。役割分担を明確にし、資料の充実に集中すべき。それこそが将来の道民が道史を手に取り親しんでいくことにつながる。	資料そのものも重要ですが、資料についての解説部分も充実させることなどにより、現在及び未来の道民が歴史資料に親しめるものにしたいと考えています。 D

（2－3） アイヌの歴史・アイヌ語・史跡・生活などについてわかりやすく取り上げることが、北海道の歴史、地域性から必要。	北海道史においては、アイヌの歴史・アイヌ語等について、分かりやすく記述することが重要な課題と考えており、今後設置される編さん委員会に諮りながら編さんを進めていきます。 C
（2－4） 戦後70年がすぎており、農地解放・公職追放・帰還兵・外地引揚げ者に関する情報が公開され、個人的にも対応できるようになっても良いのではないか。	個人情報の種類によってはまだ公開年数に至っていないものもありますが、近年は戦後の公文書等が大量に公開されるようになってきており、新たな道史の編さんも、それらの広範囲な調査をもとに進めたいと考えています。 B
（2－5） 「道内外での資料調査・収集を行い、資料の提示に重点を置いた内容とする」ことに賛同する。	資料の提示に重点を置いた道史の編さんは今回が初めてですが、永く役立つものにしたいと考えています。 B
（2－6） 北海道は広く、現代史の資料はたくさんあると思うが、普通の研究ではなかなか手に入らないような資料を掲載してほしい。北海道史の中での重点の置き方や書き方は、四半世紀もすればずいぶん変わり、通史はすぐに時代遅れになるため、資料の提示に重点を置く方針には賛成。	現代史の資料は大量にあるものの、その中から真に重要なものを選び、また御意見のように個人ではなかなか手に入らない資料を調査・収集し提供することは、編さん事業の重要な役割と考えています。 B
（2－7） 『新札幌市史』の年表（CD-ROM）は使い勝手がよいので、新しい道史でも、本に加え年表のCD-ROMを作ってほしい。その場合、戦後だけでは不十分で、それ以前の事項も盛り込むことが必要。また有識者懇談会議事録に言及があった『函館市史』デジタル版のネット公開も有用性を実感しているので、道史本文でもCD-ROMやネット公開を検討してほしい。	デジタル技術の活用は、普及や利便性の面で大変効果があると考えています。技術革新の激しい分野でもありますので、安定性・効率性を考慮しながら、時代に即応した技術活用を検討していく予定です。 C

3　道史の構成（13件）

意　見　の　概　要	意見に対する道の考え方※
（3－1） 資料編の重視に非常に共感する。通史編は１巻として、資料編は必要であれば４巻にしてもよいのではないか。	通史編１又は２巻、資料編３巻としていますが、今後資料収集の状況や内容構成の具体的検討を重ねつつ、編さん委員会に諮りながら、適切な巻構成としていきます。 C
（3－2） 戦後を中心とするようだが、前回の道史以降の研究成果についても整理し、先史から戦前の記載も多くしてほしい。古い道史が手元にあるとは限らないので、重複があったとしても北海道の歴史全般がわかるものにしてもらいたい。それが「道民に親しまれるもの」につながる。	今回の道史は、戦後の現代史を中心としながらも、先史時代からの北海道史全体について、研究成果を踏まえた「概説」を作成することとしています。 B
（3－3） 政治や経済のことばかりでなく、人びとの生活の変化がわかるような道史にしてほしい。	御意見のように、人びとの生活の変化に着目した資料の提示や叙述は重要と考えています。資料編には、社会・文化分野を扱う巻を設けることとしています。 C
（3－4） 有識者会議の論議を見ると、何か結論を急いでいるような観がある。『新北海道史』の全面的書き換え、中でも前近代史の見直しが取り下げられているのは､道史協ほか諸団体の要望に照らしても、腑に落ちない。『新北海道史』の不足は解消されていない。『新北海道史』第２巻通説１は､『新撰北海道史』の当該巻の文章の書き直しで、すでに当時、編集中にその不足が編集所内でも自覚されていたと思う。この巻だけでも書き直す必要があるのではないか。	有識者懇談会では､『新北海道史』には補うべき点が多いという認識は共有しつつも、全面的書き換えとなると相当な年月と経費を要することから、「概説」（先史以降を対象）を作成することでこれを補うという方針に理解が得られたものです。 D
（3－5） 開拓・開墾の辛苦はよく歴史書に書かれているが、私の生きてきた戦後の北海道について書かれたものは極端に少なく、物足りない思いをしてきた。戦後の歴史を詳しく知り、自分の記憶と重ね合わせることで、生きてきた時代をきちんと理解したい。	御意見のように、現代史は今生きている人々の人生と重なる時代を扱うことで、個人的な体験を時代の中に位置づけることを可能にします。そうした意義・役割を絶えず意識しながら編さんを進めていきます。 B

（3－6） 編さんの中心に「概ね第二次世界大戦以後から2000年頃までが対象」の「現代史」がおかれていることに寂しさを禁じ得ない。前回の『新北海道史』はほぼ1970年代に発刊されており、この40年間の研究成果による各時代の歴史像の塗り替えは、アイヌ史・女性史等を含めて目覚ましいものがある。これを「概説」ですませることには無理・困難を予想する。「最新の研究成果を盛り込み、高度な学術研究の水準を保つ」ことを堅持し、「本道の学術・文化の振興に寄与する」ためには、1000頁を超えるボリュームが必要。 この「概説」とは別に、北海道史のエキスを中心とする、中学・高校生にも理解できるようなヴィジュアルな啓蒙的な意味での「概説」を作成した方が、よりクリエイティヴ。「最新の研究成果を取り入れ、高度な学術研究の水準を保つ」と「平易な表現と写真や図版の多用により、道民が親しみやすいものとする」という二つを両立させることは不可能に近く、中途半端な内容に終わる。	有識者懇談会でも、最新の研究成果を盛り込みながら平易な記述で道民に提供する「概説」に対し、期待と同時に難しい作業になるのではないかとの御意見がありました。御指摘のような内容にならないよう、今後学識者による専門的な検討や編さん委員会での審議、また民間の編集者等の知見を活用するなどの工夫により、充実した「概説」の編さんに努めてまいります。 D
（3－7） 現代史の資料編は、「政治・行政」「産業・経済」「社会・教育・文化」という項目で編集とあるが、資料の歴史的背景や保存由来等の解題を充実してほしい。	資料編は単に資料を提示するだけでなく、その歴史的背景や出典などの解説を充実させ、研究者ばかりでなく多くの道民に興味深く読んでいただけるものにしたいと考えています。 B
（3－8） 財政的事情等から「現代史」とすることはやむを得ないと思う。ただ、対象時期の始まりは日中戦争からが望ましい。日中戦争からを対象にすると、総力戦体制がどのように実施されたのか、行政・政治・産業界・市民社会の統制化がよくわかり、他府県との比較、世界大戦における各国の総力戦体制との比較で共通性や類似性、北海道の特性などが把握できる。近年、アジア歴史資料センターをはじめ公文書の戦時及び占領期資料など紙資料のデジタル公開化がめざましく推進されている。戦時中の道民の歴史が戦後どのように連続し、どのように改変したのか、戦後の歩みを今回の新しい道史の資料で提示し、通史で叙述していただきたい。	有識者懇談会でも、一律に戦後から区切ることは適切ではなく、事象の性質に応じ、適宜遡って扱うべきとの指摘がありました。この観点から、御意見のように日中戦争以降終戦までの歴史についても、戦後との連続性、あるいは特に影響がみられる事象は、積極的に取り上げたいと考えています。 また公文書等の公開資料についても、できる限り調査対象として、編さんに活用していきます。 C
（3－9） 資料編に女性史分野を入れていただきたい。近年目覚ましく研究成果がみられる分野であり、ジェンダー視点による政治・社会・文化史を合体した項目を、「概説」「資料編」にも章立てしていただきたい。	御意見のとおり、女性史の視点は近年の歴史学に欠かすことの出来ない要素であり、これをどのような形で盛り込んでいくべきかは、編さん委員会での検討課題の一つと考えています。 C

（３-10） 資料編は３巻構成になっているが、「社会」を独立させた４巻が望ましい。「社会」は空襲（道民資料・米軍資料）、生活（樺太・満州・外地引揚げ含む）、女性史、労働・労働運動、市民・消費者運動、平和運動、青少年、保健医療・社会福祉など範疇が幅広いため紙幅不足の印象がある。	現代の資料は膨大にあるため、道史への掲載は調査・収集した資料の一部にとどまらざるをえず、特に「社会」分野は対象範囲が広いのは御意見のとおりです。今後、資料収集の状況も見定め、適切な巻構成となるよう編さん委員会に諮りながら検討を進めてまいります。 なお、掲載しなかったものも含め、収集した資料はすべて編さん終了後に道立文書館に移管し、一般の利用に供することとしています。 D
（３-11） 「概説」では女性史分野として、考古（恵庭カリンバ遺跡の縄文時代後期・約3000年前の女性シャーマンの登場など）、幕末の女性、近・現代すなわち明治以降の北海道女性史など。戦後の北海道の現代史（女性の参政権など）全般に反映していただきたい。研究書も多くある。「概説」には写真・図版の多用を望む。	先史時代からを対象とする「概説」が取り上げるべき女性史分野として、いずれも参考とさせていただきます。また「概説」は、御意見のように写真・図版を多用して親しみやすいものにしたいと考えています。 C
（３-12） 「年表」では、「新北海道史年表」以後を新たに追加編集し、終点はばらつきがあっても是とし、直近の2020年まで延ばし、各年に人口を入れて推移が分かるようにしていただきたい。	「年表」は、「新北海道史年表」を増補改訂するものですが、御意見のように終点はできるだけ刊行の直近とすべきと考えます。人口表示についても、今後の参考とさせていただきます。 C
（３-13） 博物館で展示を行っていて、非常に苦労するのが戦後の部分で、地域性を出すことが難しい。今回の道史では、戦後の北海道のあゆみの骨格を示し、北海道らしさとは何かを追究し新しい道を示してほしい。	現代史を中心とする今回の道史編さんによって、今につながる北海道の特質を明らかにすることができるよう取り組んでまいります。 B

４　編さんの組織（２件）

意　見　の　概　要	意見に対する道の考え方※
（４-１） 編集に当たっては、道の現執行機関の代弁にならないよう、知事の交代に左右されない独立性のある体制を取る必要がある。またそれを担保する審議会などが必要。	客観的で偏りのない道史とするため、編さんを主導する道史編さん委員会を、条例に基づく「附属機関」として設置する方向で準備を進めています。 B

（4－2） 完成まで10年間をめどとするなら、編集・執筆担当者には、完成まで担うことが出来る若い年代の人々を当てる事が肝要。	調査・執筆を担っていただく研究者は、今後専門分野を考慮しながら、学識者からの推薦をもとに依頼することとなりますが、御意見は参考とさせていただきます。 C

5　道民への情報提供等（１件）

意　見　の　概　要	意見に対する道の考え方※
（5－1） 編さん作業と道民との双方向性を高める活動は、予算上も位置づけるべき。たとえば、調査研究の成果を講演会等で報告することは、「目的」にある「郷土の歴史に対する道民の理解と関心を深める」上で、刊行物以上の効果を発揮することがある。	道史への関心を深めてもらうために、ホームページで調査研究の成果を公表したり、各巻の刊行ごとに関連する歴史講演会を開催するなどの取組を計画しています。 B

6　庶務（１件）

意　見　の　概　要	意見に対する道の考え方※
（6－1） 10年の長きに渡り新しい道史を編纂するにあたって、庶務専門の部署は創設されるのか。編纂を行う委員の組織は当然だが、庶務等の事務の運営も重要であり、円滑に進むような組織づくりをお願いしたい。道史は長く将来の重要な資料になるものなので、体制作りも万全にしてほしい。	道において、新たに道史編さんを専掌する組織を設ける準備を進めています。 B

7　その他（４件）

意　見　の　概　要	意見に対する道の考え方※
（7－1） この種のパブリックコメントが行われていること自体、格別実施していることを知らされなければ容易に気がつかず、多くの道民に意見を求めることは難しい。少なくとも、要望した各団体には通告して､会員に周知することを要請するなど、多くの意見を募る丁寧さが求められると思う。	この度のパブリックコメントは、道民意見提出手続に関する要綱に基づき手続を行ったところですが、御意見は今後の執務の参考とさせていただきます。 その他
（7－2） 今回の新しい道史の編纂のスタイルは、これから編集される道内自治体史に影響を与え、踏襲されがちなので、十分に検討していただきたい。とりわけ、時代の継続編集はしないでいただきたい。道民、市町村民が、編纂済みの分野・時代を固定的に捉えて「正しい」ものと絶対視をしがちで、せっかくの歴史編纂への新たな関心を失わせてしまう。 また、他府県・国際的にも利用される。北海道150年関連推進の目的に掲げられている文言「郷土の歴史の理解と関心を深め、道民共有の財産として後世に伝え、併せて学術・文化の振興に寄与できる」内容を期待する。	今回の道史は、編さん期間や経費等の事情から、戦後を中心とし、先史時代からの通史は新たな知見等を盛り込んだ「概説」をもって行う案になっており、前回の対象時期（「新北海道史」では1970年頃まで）を単純に継続した編さんではありません。こうした編さん形態ではありますが、充実した内容の道史となるよう努めてまいります。 C
（7－3） 編さんを機に、明治以降の函館新聞・函館毎日新聞・小樽新聞・北海タイムスなど、道内各紙の記事のデータベース化を進めていただきたい。北海道史の作成にも使え、各地で研究を進める人たちにも役立つものとなるはず。	編さん作業に伴い、収集資料とは別にどのようなデータ整備がなされるかは未定ですが、明治以降の道内新聞各紙となると対象が非常に膨大のため、現代史を中心に10年間で編さんする今回の編さんの中では、取組は困難と考えます。 D
（7－4） 全編に共通する基本資料のデータベース化を検討してほしい。明治期からデータベース化されるまでの北海道新聞（系統の新聞）や、戦後の占領期が終了するまでの北海道庁公報など。	編さん作業に伴い、収集資料とは別にどのようなデータ整備がなされるかは未定ですが、現代史を中心に10年間で編さんする今回の編さんの中では、取組は限定的にならざるをえないと考えます。 D

※「意見に対する道の考え方」のＡ～Ｅの区分は次のとおりです。

区分	意　見　等　の　反　映　状　況
A	意見を受けて案を修正したもの
B	案と意見の趣旨が同様と考えられるもの
C	案を修正していないが、今後の施策の進め方等の参考とするもの
D	案に取り入れなかったもの
E	案の内容についての質問等

問い合わせ先
総務部法務・法人局法制文書課
文書館グループ
電話０１１－２０６－６５０２